［10］

氏　　名	陶（とう）　徳民（とくみん）
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学　位　記　番　号	博第 502 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 29 年 9 月 19 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学　位　論　文　題　目	日本における近代中国学の始まり ―漢学の革新と同時代文化交渉―
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　吾妻　重二 副 査　教　授　藤田　高夫 副 査　教　授　篠原　啓方

論 文 内 容 の 要 旨

陶徳民氏の論文「日本における近代中国学の始まり―漢学の革新と同時代文化交渉―」は、昭和戦前期の中国学を視野に入れつつ、幕末明治から大正期に至る漢学と中国学、とりわけその基礎領域における文章論や人物評価および他の諸相を素材に、日本における「近代中国学」形成の道程を検討した研究である。

本論文は 2017 年 3 月、関西大学出版部からすでに出版されており（本文全 274 ページ）、この度それを博士学位請求論文として提出したものである。

内容構成は以下のとおりである。

口絵
序説　「土着」の漢学が目指した近代的革新
第一部　文章論、「文学革命」観と漢文直読の問題
　第一章　明治大正期における桐城派の文章論の影響―藤野海南・重野安繹・西村碩園などに関する考察―
　第二章　民国初期の文学革命に対する日本知識人の反応―吉野作蔵・青木正児・西村碩園などの場合―
　第三章　近代における「漢文直読」論の由緒と行方―重野安繹・青木正児・倉石武四郎をめぐる思想状況―
第二部　文章選録と人物評価をめぐる切磋琢磨
　第四章　天保期の藤澤東畝から見た銭泳編『海外新書』―荻生徂徠と大塩中斎の評価問題をめぐって―
　第五章　星野恒選編・王韜評点『明清八家文』について―『方望溪文抄』を中心とする考察―
　第六章　内藤湖南の章實斎顕彰に刺激された中国の学者―胡適・姚名達および張爾田との交流について―

附録　関西大学と二松学舎大学における講演
講演録一　明治の漢学者と中国―薩州人重野安繹・西村時彦の場合―
講演録二　三島中洲における漢洋折衷のバランス感覚―松陰・安繹・栄一との比較―
あとがき
口絵集　図版・画像出典一覧
関連論考一覧
索引

本論文は大きく前半と後半、すなわち第一部と第二部に分けられる。まず前半の第一部では漢文の文章論および 1910 年代後半に起こった中国の「文学革命」をめぐって論じられる。

第一章「明治大正期における桐城派の文章論の影響」では、江戸後期の唐船持渡書および明治期の駐日外交官がもたらした桐城派の影響、さらに桐城派として認められた藤野海南と宮島大八、桐城派の諸大家に対する亀谷省軒・重野安繹・西村碩園の評価が詳しく考察される。そして曾国藩門下の二人、すなわち駐日公使黎庶昌と蓮池書院院長張裕釗により、一部の漢学者のみならず中等学校、さらには京都帝国大学というアカデミズムの重鎮にもその影響が波及したと指摘される。

第二章「民国初期の文学革命に対する日本知識人の反応」においては、「民本主義者」吉野作造、「道家の徒」青木正児、「桐城派文章論の推奨者」西村碩園、および在中国「慈善教育者」清水安三など四人の文学革命観が検討される。加えて西村および内藤湖南・狩野直喜など「明治人」が示した反発についても「学衡」派の主張と関連づけて考察している。

第三章「近代における「漢文直読」論の由緒と行方」では、近代において重野、青木および倉石武四郎らによって提唱された「漢文直読」論とその歴史的意味が論じられる。さらに、訓読伝統への尊重と多元文化の共存という視点から、音読を主として訓読を補助手段とする今後の漢文教育のあるべき姿があわせて提言されている。

後半の第二部では、桐城派の文章アンソロジー編纂と人物評価、とりわけ章学誠をめぐる議論が考察される。

第四章「天保期の藤澤東畡から見た銭泳編『海外新書』」においては、『辨名』『辨道』という荻生徂徠の代表作が中国の『海外新書』第一輯に収録、出版されたことについて論じる。これを喜んだ藤澤東畡は徂徠への奉告祭と祝宴を挙行する。その経緯を詳論するとともに、『海外新書』第二輯に天保の乱を起こした大塩平八郎の『洗心洞劄記』などを収録する意向を察知した東畡が銭泳宛ての密書でそれを戒めたことを新たな事実として指摘している。

第五章「星野恒選編・王韜評点『明清八家文』について」では、日本人漢学者らの招聘を受けて日本訪問を果たした王韜が、中国の文人に先駆けて『明清八家文』の編成を試みた修史館員星野恒の要請により加えた評語とその意義を、桐城派の大家方望渓の文抄を中心に論評している。同時に、宮島誠一郎『養浩堂詩集』の評点に関わった王韜の取組みを、現存する筆談資料により探っている。

第六章「内藤湖南の章實斎顕彰に刺激された中国の学者」では、内藤による章實斎（章

学誠）の学問の発見とその経緯・特色を中国同時代の学者との関係を視野に入れて詳細に論じ、本学内藤文庫に所蔵される貴重書、鈔本『章氏遺書』の由来と希少価値の解明に及んでいる。

最後に附録として講演録二つを収め、重野安繹、西村時彦、三島中洲、吉田松陰、渋沢栄一ら幕末から明治・大正期に活躍した漢学者と中国との関係、漢学と近代の問題につき論じている。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

陶徳民氏の論文は文化交渉学の視点から、幕末・明治・大正期の漢学・中国学（Sinology）の展開を論じた力作であり、重要な知見を多く含んでいる。主な成果としては以下の三点があげられる。

第一に、歴史事実の発掘がある。従来、日本近代における漢学・中国学の研究は内藤湖南や那珂通世などごく限られた人物について行われるのみで、他の漢学者については散発的研究しかなかった。本論文は藤野海南、宮島大八、重野安繹、西村碩園、星野恒、内藤湖南、狩野直喜、青木正児、倉石武四郎といったキーパーソンとなりうる人物をとりあげ、彼らの学問や著書・論文、思想の新たな側面を発掘していて興味深い。また巻頭口絵には90点に及ぶ写真が掲載されているが、これだけでもきわめて貴重な資料群であり、新事実発掘に努める陶氏の貢献をよく示している。

第二に、同時代中国との関係を幅広く論じる点が斬新である。ここに取り上げられた人物は漢学者・中国学者として中国に並々ならぬ関心を持ち、また中国の学者たちと直接・間接の関係を結んでいた。ここでは彼ら日中両国の知識人の間にどのような文化的交流がなされたのかが詳論され、成果を多く生み出している。たとえば江戸後期、藤澤東畡と関係のあった銭泳の考察、明治期における桐城派の問題、星野恒と王韜の関係、章学誠評価と著書をめぐる内藤湖南と胡適・姚名達・張爾田とのやりとりなどが、手紙を含む多くの新資料にもとづき解明されている。

第三に、これらの考察の結果として、漢学から中国学へという道程が考察され、「日本における近代中国学の始まり」のありようが照射されている点を評価したい。明治以降、漢学は振るわず、時代遅れになって見捨てられたという通念とは違って、中国との関係のもとにさまざまな学的交渉がなされ、伝統的漢学界に新しい動向が生まれた。ここではそうした新たな動きに焦点を当て、戦前期、日中相互の学問的交流が両国の学術の発展をいかに促進したのかを示してくれている。文学革命に対する日本の中国学者たちの反応、漢文直読論をめぐるさまざまな摩擦や抵抗をめぐる考察にはそのような旧から新に脱皮しようとする転換の様相がよくとらえられている。

問題点としては、歴史事実の発掘に重点が置かれ、思想や文化的特色の分析に十分な紙幅が割かれていない点がある。また、近年ようやく盛んになった明治時代の漢詩の動向なども視野に入れるべきだったかもしれない。ただし、これは本論文のような歴史研究があってはじめて解かれうる課題であり、本論文自体の価値を損なうものではない。

本論文は副題を「漢学の革新と同時代文化交渉」という。全体として、伝統的漢学が近代的中国学に脱皮する道程を、ヒト・モノ・情報の流動がもたらす刺激と反応、受容と変

容の連鎖を視野に入れつつとらえていることを示し、伝統と近代、アジアとヨーロッパ、そして日本と中国という諸領域にまたがるすぐれた文化交渉学的研究になっていると思われる。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。